

初代



三代

館蔵品展

広重二代

浮世絵の世界

2025 8月19日(火) 9月28日

山崎記念 中野区立歴史民俗資料館

二代



HIROSHIGE

出品資料リスト

初代 広重		
表題	作者	年代
角筈熊野十二社 俗称十二そう	(「名所江戸百景」64図)	広重(初代)
昌平橋聖堂神田川	(「名所江戸百景」46図)	広重(初代)
筋違内八ツ小路	(「名所江戸百景」9 図)	広重(初代)
両国船中浅草遠景	(「名所江戸百景」53図)	広重(初代)
目黒元不二	(「名所江戸百景」26図)	広重(初代)
上野清水堂不忍ノ池	(「名所江戸百景」11 図)	広重(初代)
鉄砲洲稲荷橋湊神社	(「名所江戸百景」78図)	広重(初代)
芝愛宕山	(「名所江戸百景」21図)	広重(初代)
芝神明増上寺	(「名所江戸百景」80図)	広重(初代)
小奈木川五本まつ	(「名所江戸百景」98図)	広重(初代)
高輪うしまち	(「名所江戸百景」82図)	広重(初代)
はねたのわなし弁天の社	(「名所江戸百景」73図)	広重(初代)
玉川堤の花	(「名所江戸百景」42図)	広重(初代)
局岩ふじ	(「東都高名会席尽」)	役者=歌川豊国(三代)背景=広重(初代)
「東海道五十三次図会」より興津・蒲原・由井	広重(初代)	安政3年(1856)2月
ミやつかへ立身寿語六(双六の袋)	広重(初代)	安政3年(1856)2月
名物鰯寿いめ焼(亀鉄のチラシ)	広重(初代)の作品を使用	嘉永年間(1848-53)
東海道五拾三次之内(保永堂版・復刻版)	広重(初代)	昭和7〜18年(1932-43)
東海道五十三次(復刻版)	広重(初代)	
名所江戸百景(復刻版)	広重(初代)	
六十余州名所図会(復刻版)	広重(初代)	
花鳥短冊(復刻版)	広重(初代)	
江戸じまん(双六)	画=広重(初代)カ 書=綾岡輝松	

二代 広重		
表題	作者	年代
花の曙錦の行烈	広重(二代)	安政4年(1857)2月
市ヶ谷八幡	広重(二代)カ	安政5年(1858)10月
上野山した	広重(二代)カ	安政5年(1858)10月
山城宇治川螢狩之図	歌川豊国(三代)広重(二代)合作	文久元年(1861)8月
渡辺源治綱	広重(二代)(署は重宣)	嘉永年間(1848-53)
本所の勝景(中)	広重(二代)(署は重宣)	安政3年(1856)2月
千駄ヶ谷	広重(二代)	文久2年(1862)
浅草寺	広重(二代)	文久元年(1861)
梅屋敷	広重(二代)	文久2年(1862)
白髭明神	広重(二代)	文久年間(1861-63)
振高松之図	広重(二代)	安政2年(1855)12月
大井川運合渡之図	広重(二代)	文久3年(1863)4月
今戸焼物	歌川豊国(三代)広重(二代)合作	元治元年(1864)7月

三代 広重		
表題	作者	年代
築地ホテル館表掛り	広重(三代)	明治3年(1870)
安芸国厳島楊枝ヲ露図・同広島牡蠣番養之図(大日本物産図会)	広重(三代)(署は安藤徳兵衛)	明治10年(1877)頃
下総国醤油製造之図・同西瓜畑之図(大日本物産図会)	広重(三代)	明治10年(1877)頃
加賀国菅笠ヲ造ル図・加州熊井ニ胆ヲ取ル図(大日本物産図会)	広重(三代)	明治10年(1877)頃
尾張国有松額り之図・尾州名古屋扇折之図(大日本物産図会)	広重(三代)	明治10年(1877)頃
信州蕎麦切製造之図・信濃国水巾八ツ目鯉採ノ図(大日本物産図会)	広重(三代)	明治10年(1877)頃
東京名勝両国橋新築図	広重(三代)	明治8年(1875)
東都築地異人館 海岸より見る図	広重(三代)	明治元年(1868)8月
東京名所之内 新橋汐留蒸気車鉄道局停車館之真図	広重(三代)	明治12年(1879)9月
亀井戸天満宮藤の花	歌川国明(二代)広重(三代)合作	明治期(1868-1911)
東京真景名所双六	広重(三代)	明治20年(1887)9月

UTAGAWA HIROSHIGE

歌川派と広重

歌川派は、江戸時代後期から明治にかけて大きな勢力を持った浮世絵師の一流派である。

浮世絵版画に西洋の遠近法を取り入れた歌川豊春から始まり、歌川豊国、歌川豊広が

弟子となった。幕末には、美人画を得意とした歌川国貞(三代目豊国)や

武者絵の歌川国芳、風景画の歌川広重が出た。

明治期に入っても国貞・国芳一門は一大勢力だったが、

写真の流行とともに、浮世絵への需要は落ちこんでいくことになる。



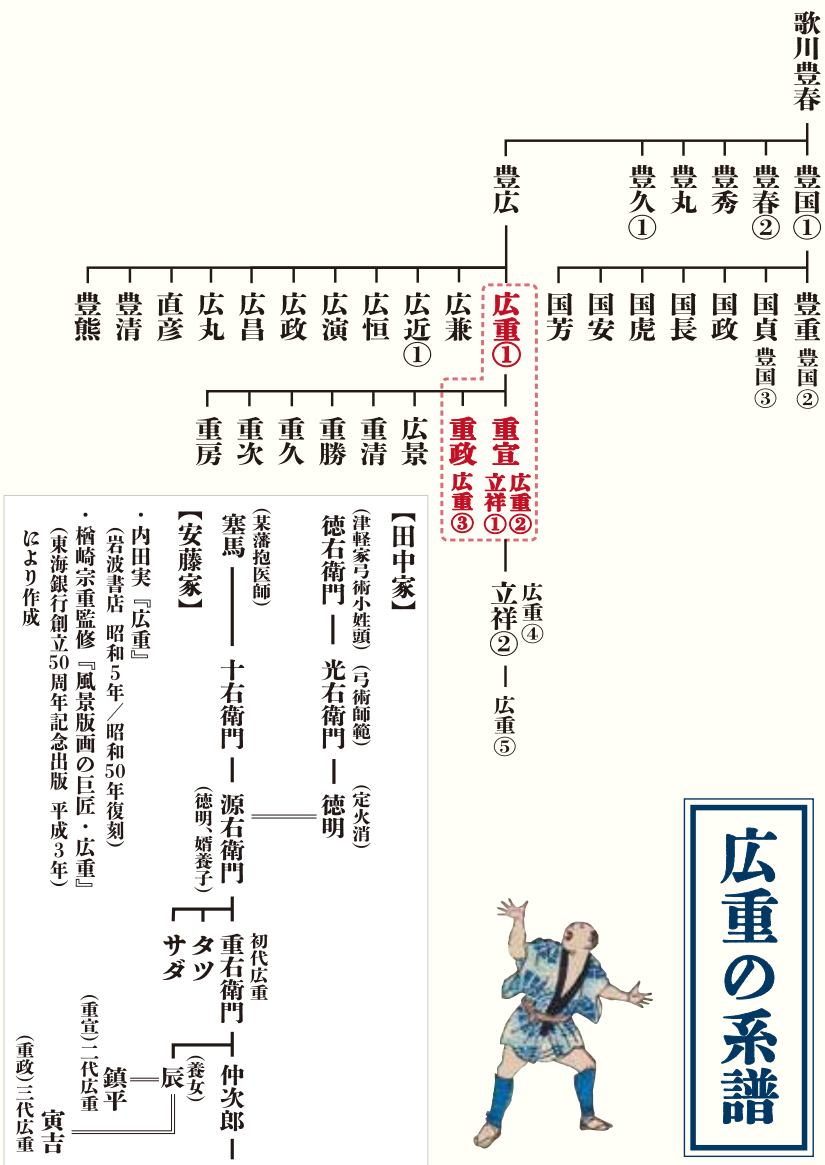
二代 梅屋敷
(「江戸名勝図会」44図)

梅屋敷は、浅草の商人伊勢屋彦右衛門の別荘。300本の梅木が植えられた「清香庵」に由来する。竜が地を這うかの古木「臥竜梅」は水戸光圀の命名という。明治43年(1910)の水害により、梅の木はすべて枯死した。



初代 玉川堤の花
(「名所江戸百景」42図)

新宿御苑の旧新宿門あたり。江戸に飲料水を供給するため多摩川から引かれたのが玉川上水。新宿付近では甲州街道沿いに流れていた。土堤には桜の木が植えられ、花見の場所として有名に。



広重の系譜



三代 築地ホテル館表掛り
(「東京名勝尽」)

日本初のホテル兼貿易所「築地異人館」は、明治元年(1868)11月に開業。延床面積1600坪。2階建ての壮麗な外観で注目されたが、明治5年(1872)2月に焼失し、わずか3年余の営業に終わった。

11



10



三代
広重



天保13～明治27年
(1842～94)

本名は寅吉、寅次郎、徳兵衛。初代広重に入門して重政と称す。号は一笑斎。初代はすでに晩年だったため、実質的な師は二代広重である。二代が初代から引き継いだ「絵本江戸土産」第1編に「重政筆」の挿絵がある。慶応3年(1867)、二代と離縁した初代の養女と結婚し、三代広重に。その際「二代目広重」と称した。間もなく幕府は倒れ、時代は明治となる。文明開化の波が押し寄せ、政治も社会も生活も一新されて行く。この時期、横浜絵や東京絵、開化絵が流行。若い三代広重は、慌ただしい世相を客観的に眺め、写実性を重視した即物的な描写で空間を埋めた。画面情報の多さが大衆を刺激し、人気を博した。



12



10 下総国醤油製造之図・同西瓜畑之図(大日本物産図会)

〔上〕人口100万の江戸では、醤油の需要が急増。東北の大豆を船で運び、関東の豊富な水・塩・小麦を活かして、生産を拡大した。
〔下〕スイカ栽培は江戸時代から。初期は黒皮系で、シマ系は明治期に。千葉県では富里、八街、山武、芝山が主産地である。

11 安芸国厳島楊枝ヲ齎図・同広島牡蠣番養之図(大日本物産図会)

〔上〕厳島神社の土産は元々「色ようじ」だった。櫓や櫓で作られ、赤・黄・緑・紫・藍の5色に塗られていた。
〔下〕広島かきの養殖は室町時代に始まった。400年以上の歴史を持つ。

12 亀井戸天満宮藤の花(「開明東京名勝」)

二代歌川国明と三代歌川広重の合作。亀戸天神は、寛文2年(1662)に太宰府天満宮から勧請。境内には本社と同様、「心字池」や3本の太鼓橋がある。

13



13 東京名勝両国橋新築図 隅田川の橋の中で、2番目に古い両国橋は、明治8年(1875)、オランダ人リンダーの設計で約165mの洋式木橋に。馬車に乗る人、人力車、馬に乗る人、洋傘を持つ人、背広を着る人、さまざまな商人が描かれ、活発な往来の様子がわかる。

二代
広重

文政9～明治2年
(1826～69)

初代広重の門人で、本名は鎮平(姓は鈴木か)。最初の画名は重宣。号は一幽斎・立斎、立斎、初代の弟子の中でも、重宣は別格で師の補佐役。遺言状に「重宣は長く側に居たので、二本の脇差のうち一本を遣ってくれ」とあるのは信頼の証である。初代の死後、重宣は師の養女の婿となり「広重」の名を継ぐ。堅実な仕事ぶりは版元に高く評価されたが、妻とは20もの年齢差があり、家庭内問題が多かった。慶応元年(1865)、離縁して安藤家を離れた。二代広重は画名を「立祥」(喜斎立祥)と改め制作を続けた。「東京名所三十六花撰や開港のにぎわいをとらえた横浜絵、輸出向け茶箱の装飾ラベルなどを手がける。いわゆる「茶箱広重」は立祥のことである。



7



6



6 浅草寺(「江戸名勝図会」27図)

浅草寺は江戸第一の名所。嘉永5年(1852)には花屋敷が開園し、菊人形目当ての人々が浅草に集まった。浅草寺は江戸庶民だけでなく、のちに外国人の観光スポットとなった。

7 本所の勝景(中)

正月の情景を描く。本所は街外れの土地だったが、江戸後期には住宅地・商業地に発展した。向島にかけて料亭が立ち並び、隅田川の桜並木は庶民の行楽地となった。

8 上野山した(「名所江戸百景」12図)

上野山の東麓一帯。水茶屋や料理屋、床見世・見世物小屋があり、両国広小路や浅草奥山に並ぶ盛り場だった。「しそめし」と大書した料理屋伊勢屋はのちに「雁鍋」と改称。上野戦争での記録にも登場する。

9



9 花の曙錦の行烈

参勤交代など、大名が行列を組む際は武具、馬具、日用品、湯船など多くの道具を持ち運んだ。従者が持つ「扶箱」には家紋が入るのだが、本作ではそれがなく、どこか大名か特定できない。「乗物」や「長柄」など、格式により使えるカゴの種類が決まっていた。

初代
広重

寛政9～安政5年
(1797～1858)



本名は重右衛門。江戸定火消の安藤家に生まれ、武士身分ながら絵師となった。天保4年(1833)、保永堂版「東海道五十三次」を刊行。「豊国の似顔、広重の名所」と賞され、名声は高まる。以後、構図や描法を変えつつ多くの東海道シリーズを描いた。安政3年(1856)から始まった「名所江戸百景」は最晩年の傑作。近景と遠景の大胆な切り取り、俯瞰・鳥瞰を駆使した多様な視点、ズームアップなど、斬新な構図が多い。19世紀後半のヨーロッパで起きた「ジャポニスム」(日本趣味)は日本への憧れをかきたて、ゴッホやモネ、ルノワールなど印象派絵画に影響を与えた。ゴッホがこの名所シリーズから「大はしあたけの夕立」を油彩模写したことは、よく知られている。

3



1



4



2



3 高輪うしまち(「名所江戸百景」82図)

幕府は京から牛屋木村清兵衛を招き、材木や大石の運搬にあたらせた。その人足町が牛町で、海に面した眺望や月見の名所としてにぎわった。車輪のカーブと虹のカーブを呼応させ、空間の広がりをうまく表現している。

4 芝愛宕山(「名所江戸百景」21図)

港区芝の愛宕神社は、江戸湾を一望できる絶景ポイント。正月3日、毘沙門天の使者が大しやもじを手に男坂の階段を下り、円福寺の本殿で、僧たちに「飯を食え、食わないか」と迫る強飯式は、名物行事の一つだった。

5 局岩ふじ(「東都高名会席尽」)

三代歌川豊国の役者絵と初代歌川広重の風景画を組み合わせた合作シリーズ。岩藤は加賀騒動を描いた歌舞伎の演目に出てくる悪女である。「藤屋」は深川洲崎の料亭の名で、蛤料理で人気だった。一種の宣伝絵である。

1 小奈木川五本まつ(「名所江戸百景」98図)

江東区清澄2丁目の辺り。現在の小名木川で、元は隅田川と中川を結ぶ運河として開かれた人工河川である。千葉・行徳塩田から日比谷の入り江まで塩を運んだが、やがて他の物資や人も運ぶようになった。

2 はねたのわたし弁天の社(「名所江戸百景」73図)

羽田は多摩川最下流の渡して、対岸の川崎大師に通じていた。河口中洲の玉川弁財天が、三浦半島辺りまでを望む遠景と対比されている。船頭の背中側に穴守稲荷神社があり、この一帯はのちに、羽田空港の用地となった。

5

